

正解がない中で試行錯誤を繰り返しながら
農業に励んでいます。



農業に懸ける情熱



1 就農したきっかけ

実家が農業を営んでいたため、幼いころは父が運転するトラクターに乗ったり、畑で遊んだりするなど、農業に触れて育ってきましたが、農家を継ぐ気は特にありませんでした。そのため、高校卒業後は京都府の大学に進学し、卒業後も京都府で就職する予定でした。

しかし、両親が離農を考えていることを知り「今が農業を継ぐ良いタイミングかもしれない」と思ったことをきっかけに、地元に戻り、22歳の時に就農しました。

2 就農当時のこと

農家を継ぐことに抵抗はありませんでしたが、実際に就農してみると体力仕事が多く、想像以上に大変でした。

就農当初は作業に慣れていなかったため、父や兄が平然とこなしている作業が自分だけうまくできないことにもどかしさを感じることもありました。作業の様子を積極的に見て学び、1日でも早く力を付けるために努力しました。

楽しいことばかりではありませんでしたが、幼いころの良い思い出があったこともあり、壁にぶつかっても諦めることなく、農業に向き合うことができました。

3 青年部活動について



地元の先輩から誘ってもらったことをきっかけに、就農と同時に青年部に入りました。青年部での活動を通して、農業に関する知識を共有したり、何でも気軽に相談できる仲間を作ることができました。

現在は、岩見沢支部三笠班の班長を務めています。三笠班の人数は7人と少人数ですが、同世代の盟友が多いこともあり、和気あいあいとした雰囲気です。

今後とも盟友同士の交友関係を深めることができるように、楽しみながら積極的に青年部活動を行っていきます。

4 農業者として 大変なこと

農業は自然が相手なので、肥料を変えても変化が出ないなど、自分の立てた予想が当たらないことも少なくありません。正解がない中で試行錯誤を繰り返さなければいけないのは大変だと感じます。

その反面、自分の作った米を食べた友人に「おいしい」と言ってもらえた時には強いやりがいを感じます。自分が丹精込めて作った作物が食卓に並び、消費者に喜んでもらえるのは農家という職業にしかない魅力だと感じています。

5 今後挑戦したいこと

今後は、自分の作物をブランディングしていきたいと考えています。同じ作物でもほかの生産者との差別化を図り、付加価値を付けるため、現在は有機栽培や減農薬栽培に力を入れています。

将来的には、自分の名前の作物を選んで購入してくれる消費者が増えるのが嬉しいです。高品質な作物を栽培するために、家族で意見を出し合いながら、より良いものを作ることができるよう、今後も工夫して作業に取り組んでいきます。



人物 memo

三笠市萱野

山崎 和幸 さん(29歳)

父の正広さんと母のみどりさん、兄の数弥さんの家族4人で約21haの農地に水稻やタマネギ、小麦を栽培。高校卒業後は京都府の大学に進学しましたが、両親が離農を考え始めたことをきっかけに地元に戻り、22歳で就農。現在は岩見沢支部三笠班の班長を務め、充実した生活を送っています。